

## 研究者の道への第一歩

### 学振特別研究員9名がそれぞれの研究活動、抱負を語る

多元数理学研究科では、「日本学術振興会特別研究員(JSPS)」†への応募を積極的に薦めています。平成21年度には、新しく4名が日本学術振興会特別研究員(DC2)に採択されました。昨年度までに採択された5名(PD:1名,DC1:1名,DC2:3名)と合わせて現在9名が活動しています。9名の方々の、現在取り組んでいる特徴的な活動、今後予定している活動などをご紹介します。

†(特別研究員制度は、我が国トップクラスの優れた若手研究者に対して、自由な発想のもとに主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成、確保を図る制度です。URL: <http://www.jspss.go.jp/j-pd/index.html>)



**D3 米澤康好(DC2)**  
立教大学平成14年度卒  
私の研究テーマは「量子不変量に付随するホモロジー

一不変量を構成する」です。これに取り組んできました。そして最近、最も基本的なA型量子不変量のある特殊なものに対してホモロジー不変量の情報を持つ絡み目多項式不変量を構成することができました。

また、8月24日(月)~8月28日(金)には夏の学校「結び目とホモロジーおよびその周辺」を開催し、48名の参加がありました。



**D3 野田尚廣(DC2)**  
名城大学平成15年度卒  
私の研究課題は「微分方程式の幾何構造の研究」である。

この分野はSophus LieやElie Cartanといった偉大な先人たちによって切り開かれ、今なお未知の領域を持つ可能性に満ちた分野と考えられる。私はこの分野における伝統的な問題意識である微分方程式系の局所同値問題や対応する幾何構造の研究などに取り組んでいる。研究の目的はよい方程式系、ならびにそれに関わるよい幾何構造を見つけ、それらを体系的に研究する事にある。



**D3 大木俊輔(DC1)**  
名古屋大学平成16年度卒  
私の現在の研究テーマは **cone-manifold** です。

cone-manifoldは例えば、3次元双曲多様体の双曲構造を、特異性が生じることを許して変形するときなどに自然に現れます。M1のとき、HodgsonとKerckhoffによる3次元hyperbolic cone-manifoldのlocal rigidityの論文を読んでこのテーマに興味を持ちました。今は特に、cone-manifoldに関する種々のrigidityの問題や、cone-manifold上のLaplacianの固有値の評価の問題に取り組んでいます。



**D2 関谷雄飛(DC2)**  
名古屋大学平成17年度卒  
今年度は多元環の表現論の手法を応用して代数幾何、特に

商特異点の特異点解消に関する研究を行っています。3次元商特異点のクレバント解消のフロップの間の関係について調べ、Mckay籠の表現のモジュライ空間として全てのクレバント解消が構成できるかという問題を考えています。研究を促進する取り組みとして、前期は学生プロジェクトで、多元環の表現論を専攻している学生とセミナーを開いたり、また、Miles Reid氏のもとを訪問し研究内容を紹介し議論を交わしたりしました。後期はイギリスのAlastair Craw氏を5~6か月程度訪ねる予定です。



**南出真(PD)**  
京都産業大学平成15年度卒  
 $\zeta(s) = \frac{1}{1^s} + \frac{1}{2^s} + \frac{1}{3^s} + \dots$  の非自明零点達の実部は1/2であると主張するのがリーマン予想である。これは全く解かれていないが、零点全体のうち少なくとも2/5以上は  $1/2 + it_n$  の形であり、しかも単根であることがProf. Conreyによって示されている。一方、双曲空間に対して定義されるセルバーグゼータ関数  $Z(s)$  はリーマン予想がほぼ成り立っているが、その零点の重複度については何もわからない。そこでProf. Luoの新ワイルの法則という素数の研究が登場した。それに触発され、**Z'(s)の零点の研究**に夢中である。東工大の赤塚広隆さんと共に奮闘努力の日々を送っている。(不良数学者)



**D3 和田堅太郎(DC2)**  
名古屋大学平成15年度卒  
**Ariki-Koike代数  $H_{n,r}$  及び  $q$ -Schur代数  $S_{n,r}$  のモジュラー表現論**を中心に研究しています。 $H_{n,r}$ は、 $G(r,1,n)$ 型の複素鏡映群( $n$ 次対称群と $r$ 次の巡回群とのwreath積)の群環をパラメータを入れて変形したもので、 $S_{n,r}$ は“ある $H_{n,r}$ -加群”の自己準同型環として定義されます。 $H_{n,r}$ はcellular代数、 $S_{n,r}$ はquasi-hereditary cellular代数であることが知られているので、それらの構造を利用して研究しています。 $r=1$ のとき、 $H_{n,1}$ は対称群のIwahori-Hecke環、 $S_{n,1}$ はA型の $q$ -Schur代数となるので、この場合に知られている多くの結果を一般の $H_{n,r}$ や $S_{n,r}$ へ拡張すること、 $r=1$ の場合との異なる点を明確にすることによって、 $H_{n,r}$ や $S_{n,r}$ の構造を調べています。また、これらのことを他の型のcyclotomic Hecke代数の表現論に拡張したいと考えています。



**D3 大溪正浩(DC2)**  
名古屋大学平成16年度卒  
**群が作用する可換環**について調べています。現在は、群がある環に作用するとき、その環に関連する環へ誘導される作用について調べています。このとき、各々の環の性質については細かく調べられ、密接に関連することが知られています。これらの先行する結果を踏まえて、不変式環がどのような性質を持つかを調べています。さまざまな理論が絡み合って現れる不思議な現象に驚き、戸惑いつつも楽しんでます。愚痴ばかりの我が身にさきながら毎日繰り返してしまう自分でも支えてもらっていることに感謝し、研究に専念できることを喜んでいます。



**D3 松本拓也(DC2)**  
名古屋大学平成16年度卒  
私は数理論理学、特に超弦理論によって示唆された**弦理論とゲージ理論の対応関係**を可積分系の観点から調べています。今年度は、ドイツで開催された国際会議に参加し、最近の進展について講演者から直接話を聞くことができました。また自分の研究が最近の展開の中でどのような位置づけにあるのかを自覚する大変良い機会でした。現在は、この対応関係に潜む代数構造を例外型の超リー代数を用いることによって、より明確に理解していきたいと思っております。今後は、さらにこのリー代数の物理的な意味も理解したいと考えています。



**D3 塩見大輔(DC2)**  
立命館大学平成16年度卒  
私の専門分野は**関数体上の整数論**です。主には、有限体上の一変数有理関数体やその上の代数拡大体について研究しています。なかでも特に、cyclotomic function fieldと呼ばれる体に興味を持っており、その因子類群や合同ゼータ関数の性質について調べています。

# 発展・成長を続ける学生プロジェクト

## 学生プロジェクトメンバーの今期の活動報告

2006年に発足した学生プロジェクトは、今年で4年目となり、引き続き活発な活動を続けています。特に最近では、自発的に国内・海外問わず研究会に参加するメンバーが多くなっています。また他大学の研究者を招聘しての講演なども盛んです。当プロジェクトの目標、「学生が主体的に取り組むことで、研究企画・運営能力を養う。」が根付いてきているのを感じます。

本年度採択された15組の「学生プロジェクト」の中から、今回は7組のそれぞれのプロジェクト課題に関する活動を紹介します。活動を行った本人に取材しました。

### 「Bergman核に関連する幾何と解析」

D2 山路哲史

2009年6月2日～6月3日に、京都大学数理解析研究所で行われた研究会

「群の表現と非可換調和解析の新展開」に参加

研究会に参加すると、他の研究者の最新の結果について知ることができます。また講演者以外の参加者も多く、いろいろな方々と出会い、研究に関する意見交換や、他大学の学生の様子等も聞く事ができました。学生プロジェクトによって出張費が確保されていると積極的に研究会に参加することができるのでありがたいです。

### 「A generalized Gelfand's hypergeometric system」

D3 U. Zunderiya

2009年8月5日～8月10日まで、上毛高原の玉原国際セミナーハウスにて開催された研究会「Workshop on Integral Geometry and Group Representations」に参加

We give a combinatorial formula of the dimension of global solutions to a generalization of Gauss-Aomoto-Gelfand hypergeometric system, where the quadratic differential operators are replaced by higher order operators. We also derive a polynomial estimate of the dimension of global solutions for the case in  $3 \times 3$  variables.

### 「幾何学と確率論」

D3 豊田哲 (D2 蒔田プロジェクト)

8月7日に神戸大学でGCOE研究員の近藤剛史氏との研究打ち合わせに参加

テーマ「群の剛性問題についての考察」

最近考えていることを聞いて頂いて、意見を聞くことが目的でした。近藤さんは、いつも数学に限らず広くアドバイスを頂ける、僕にとって貴重な先輩です。彼がいるので、このごろ時々神戸大学を訪れます。神戸大学は六甲山の中腹にあって、神戸の街と海を見下ろせるあのキャンパスがとても好きです。今回は、思いのほか暑い日で、朝、汗ビショリになって六甲山を登りましたが、予想していた以上に有益な議論ができて、六甲山を下りながら神戸の夜景を見下ろして、何だか満ち足りた気分でした。

### 「数論的多様体の研究」

D1 杉山倫

第17回整数論サマースクール「1進ガロア表現とガロア変形の整数論」

(期間:2009年8月17日～8月21日)に参加

サマースクールにおいて、同世代の人たちと一緒にガロア表現・ガロア変形について基礎から学び、様々な話をするのはいい刺激となり、有意義な時間を過ごすことができました。そして、ガロア表現・ガロア変形の考え方を知ることができたことは大きな収穫でした。また、短い時間ではありましたが、100名近い参加者の前で自分の結果について発表できたことはいい経験となりました。これらの経験を今後の研究に活かしていきたいと思っています。

### 「ゲージ理論を用いた幾何学の探求」

D3 四ツ谷直仁

2009年6月22日～6月24日に京都大学数理解析研究所にて行われた

「部分多様体論とその周辺領域における新たな研究対象」に参加

今回の研究会は、その世話人である小野肇さんと私の研究に共通点が多いことから、研究に関する様々な助言や問題意識について何う事ができるかと無い機会になりました。また同多元数理論科学科から発表者として参加された恩田君を始め、他大学院からも自分と近い世代の若い研究者が立派に活躍されている姿を見る事で、自分にとっては非常に貴重な経験と刺激になりました。

### 「非線型分散型方程式の初期値問題に対する適切性と非適切性」

D2 加藤孝盛

京都大学人間環境学研究所にて開催されたRIMS研究会

「調和解析と非線型偏微分方程式」(期間:2009年7月6日～7月7日)に参加

私が最も興味をひかれたのは、岸本氏の講演であった。彼の目的は、正則性の指数  $s = -3/4$  のときKdV方程式に対する初期値問題の時間局所的適切性(LWP)を示すことである。 $s > -3/4$  においてはLWPが成立することは通常のFourier制限ノルム法で示すことができるが、端点の  $s = -3/4$  は証明できない。そのため彼は、非線型項の影響を厳密に反映し、部分的にBourgain空間の重みを修正した関数空間を構成するという工夫をすることにより端点でのLWPを導出することに成功した。更にI-methodを利用することで解を大域的に延長し、多くの研究者が挑戦した未解決問題に彼が終止符をうった。

### 「Mckay対応とその周辺」

D2 関谷雄飛 M2 林俊宏

韓国西江(ソガン)大学にて、Miles Reid教授が開催のセミナーに参加、研究成果発表

(期間:2009年8月3日～8月9日)

D2関谷雄飛さんとM2林俊宏さんは、今年8月、韓国ソガン大学で開かれた研究会に参加し、Warwick大学のMiles Reid教授と議論、情報交換などを行い、有意義な研究交流をしました。

やはり一番の難関は、数学に関する英語でのコミュニケーションでした。英語学習の重要性を改めて実感しました。

Miles Reid教授からは研究に関して大変有益なコメントを頂きました。また、一番に残ったことは韓国料理の美味しさです。有意義かつ楽しい研究交流でした。

韓国滞在中に、「クレパントな特異点解消・crepant resolution研究」の有望な若手研究者である、Sarah Davis氏(Warwick大学大学院生)と知り合えたことは大きな財産でした。彼女は本プロジェクトメンバーと非常に近い研究を行っており、互いに良い刺激を与え合う事ができました。

## 大学院生による発表論文数、口頭発表数

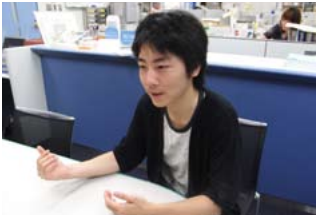
当プログラムの実施により、多元数理論科学科の教育支援体制は一層充実してきています。研究科の多くの教員や学生と議論する中で広い視野に立って問題を見いだして学位論文作成へと導くことを意図して複数アドバイザー制を取り入れていることにより大学院生の活動の幅が広がり、論文執筆や口頭発表の数が増加傾向にあります。特に2008年にはその傾向が顕著に見られます。

大学院生による発表論文数、口頭発表数(過去5年)

年度	発表論文数*	口頭発表数		
		国内発表	国外(国際)研究会発表	
2004	3	30	3	
2005	3	6	2	
2006	3	8	0	
2007	3	14	1	
2008	公表済	3	60	9
	掲載決定済	3		
	arXiv掲載	5		

\* 2004年から2007年までの発表論文数は、権威ある学会誌、学術雑誌、一般雑誌に掲載された査読付き論文の数です。

# 少人数クラスの特長を研究に生かして



多元数理科学研究科では、少人数クラスのシステムをより柔軟で選択肢を広げた形に変更するなど、教育システムの充実、改善に努力しています。今年度からは原則として教員は全員が少人数クラスを担当することとし、院生の皆さんは修士1年次と2年次で指導教員を継続することも、また異なる教員を選択することも可能になりました。多様な学生の要求に応え、能力を十分に生かすことをめざすこのシステムの下、生き生きと研究活動を展開している前期課程2年の平山浩之さんにお話を伺いました。

**辰巳:** 平山さんはどんな研究をしていらっしゃいますか?  
**平山:** M1のときから続けている研究内容は、非線型偏微分方程式です。特に、KdV方程式などの分散型方程式の適切性(解の存在、一意性、初期値に対する解

の連続依存性)について研究をしています。M2になって新たな分野として流体力学と数値解析の勉強を始めました。

**辰巳:** M2になって新たな分野の勉強を始められたとのことですが、M1から続けてきた研究にどのような広がりがありましたか?

**平山:** M1のときから親しんできたKdV方程式が浅瀬を伝わる波をモデル化したものであることは知っていたのですが、流体力学を学んだことによってそれがどのようにして導かれるのかを知ることができました。また、それによってKdV方程式の元となる水面波の方程式に興味を持つきっかけとなり、現在はM1から続けている非線型分散型方程式の研究に加えて、水面波の自由境界値問題の適切性についての論文を少しずつ読み進めています。

**辰巳:** M2で異なる指導教員を選択して、新たな分野の研究に取り組んだことで、また新しい興味を持つきっかけになった訳ですね。

**平山:** 流体力学と並行して勉強し始めた数値解析では、具体的に解の形を定めることが困難な微分方程式の解を近似的に求め、それをグラフ化することができるので、現象を視覚的に理解するためのよい道具となっています。数値解析を用いて分散現象をグラフ化して

たことで、分散現象がどのようなものであるのかをよりよく理解することができ、非常に役立ちました。

**辰巳:** では、修士論文はそれらに関連する内容をまとめるご予定ですか?

**平山:** 修士論文は昨年度から続けている「非線型分散型方程式の適切性について」をメインテーマにする予定です。この内容に加えて今年度から学んでいる流体力学の「水の波の自由境界値問題」との関連や、数値解析による微分方程式の近似解のグラフを載せることも考えています。




**辰巳:** 最後に、修士修了後は、どのような道へお進みますか?

**平山:** 修士終了後の進路ですが、地元の横浜の中小企業への就職が決まりました。数値解析や微分方程式を扱う仕事なので、これまで学んできた知識が活かせると思います。私にとって研究は、楽しみの一つです。研究を行うことによってどんどん知識が増えていきますし、新たな発見を得ることもあります。長い計算の末に、意味のある結果が得られたときはとてもやりがいを感じます。研究の醍醐味はここにあると思います。ですから、仕事に慣れてきたら社会人コースで博士後期課程に進み、仕事をしながら数学の研究に取り組みたいですと考えています。

(辰巳順子、小崎和子)取材日:2009年7月23日

## 学生プロジェクトを経験した先輩たちから

「学生プロジェクト」の代表を務めた経験を持ち、キャリアパスの一環として導入された「教務助教」の初代として教育経験を積んで巣立っていった先輩達から、ご自身の経験を踏まえたメッセージをいただきました。後輩たちの明日のために贈るエールです。

こんな人です	こんな研究をしています	メッセージ
川上裕さん 九州大学大学院 数理学研究員 GCOE学術研究員 	ガウス写像の視点からの曲面の大域的性質を調べる研究 3次元双曲型空間内の平均曲率1の曲面や平坦フロントの大域的性質をガウス写像の値分布を用いて調べる研究	多元数理時代からの人の助言や励ましが研究に力を与えてくれます。 出合いを大切にして、活躍を広げていってください。
中村隆さん 東京理科大学 助教 	整数論で中心的な役割を果たすゼータ関数の値分布を、確率論などを用いての研究、主にセルバーグクラスと多重ゼータ関数について	他大学の先生方から、名古屋大学の大学院生は元気があって良いですねと言われます。学生プロジェクトは他大学にも徐々に認知されているので、この調子でプロジェクトを大いに盛り上げ、さらに発展させることを願っています。
野原雄一さん 東北大学 GCOE助教 	専門は微分幾何で、主に複素幾何やシンプレクティック幾何などが交わっているような分野に興味があります。最近特に旗多様体(これは表現論とも関わりが深いものです)のシンプレクティック幾何的な側面や、そのミラー対称性への応用について、いろいろ考えています。	学生プロジェクトに所属していた当時、直接自分の研究のためというつもりもなく、なんとなく関心を持った他のプロジェクトセミナーの内容が最近になって研究に関係してきたりして、勉強するのに良い環境だったと改めて思っています。

### 大先輩からのメッセージ

### 古い殻を突き破り、新しい息吹を

名古屋大学名誉教授青本和彦先生は、今年度4月から4年生および大学院生を対象に特殊関数の講義を担当されています。トレードマークの帽子と快活な笑い声は以前と少しもお変わりになりません。退官を祝うパーティの際、「すうがくはたのしきかな」という言葉を参加者たちに贈られました。そして今大先輩として、現在名古屋大学に学ぶ後輩達へこんなメッセージを寄せていただきました。



#### ■青本和彦先生プロフィール

東京大学大学院数物系研究科修士課程修了  
 東京大学理学部講師、東京大学教養学部助教を経て、  
 昭和53年名古屋大学理学部教授に就任  
 平成7年名古屋大学大学院多元数理科学研究科教授(改組による)  
 平成14年3月 定年退官後平成21年3月まで 京都産業大学客員教授

私の若い頃(私の大学卒は1961年)所属する大学に一流の先生や先輩もおられました。分野やテーマが限られ、世界の中心的な数学の流れについて入手できる海外からの文献や情報も限られ、勉強の仕方はやみくもに好きな題材を片っ端から自分で勉強してみるというものであった。ひとつだけ大変幸運なことがあった。それは海賊版の存在である。海外の一流の数学者の

書物の海賊版、たとえばE.P. Wignerの群の表現論、P. Alexandrov-H. Hopfのトポロジー、L.S. Pontrjaginの連続群論、W.V.D. Hodge-D. PedoeやA. Weilの代数幾何学、S.S. Chernの微分幾何学の本などである。これらの本が大学通りの小さな古本屋(?)に並べてあって私たち学生にも手頃な値段で買うことができた。もうひとつは、私の専攻したリー群のユニタリ表現論に関するI.M. Gelfand, M.A. Naimarkらのロシア語の本の存在である。たとえばI.M. Gelfand-G.E. Shilovの一般化関数論。これもナウカというロシア(ソ連)の文化・経済を宣伝する店で安価に入手できた。これらの本のお陰で当時の最先端の数学の核心にある程度触れることができたのである。当時私の興味の対象であったリー群のユニタリ表現論では表現の行列成分として球関数は興味ある関心事であった。「関数とは何か? 何を以て表現したらよいか?」すでにI.M. GelfandやHarish-Chandraらが球関数に密接に関係するホロサイクル変換について研究し、見事な結果を出していた。しかし私はこれをもって一般的な関数方程式の見方から捉えられないかと考えて修士論文では対称空間にかかわるホロサイクル変

換および逆変換を扱った。そこには2階の線形双曲型偏微分方程式の基本解の構成におけるJ. Hadamardの魅惑的な手法に類似点を見出すことになった。今から思えば私の青春時代は好奇心だけが頼りだったと言える。当時の最も大きな話題と言えば、間違いなくAtiyah-Singerの指数定理であった。先輩や仲間とともに何回か研究会を開き勉強した。この定理を理解するためにトポロジー、微分幾何、関数解析など多くのものを学ぶことができた。しかしこの定理の真髄は結局のところ私は未だに把握しているとは言いがたいのだが。米国のある数学者の言葉:「数学者として成功するには次のどれかの資質が必要である。"smart"であること、"curious"であること、"persistent"であること。」3番目にちょっと戸惑った記憶があるが、私のここ30年の研究生生活はこの3番目のそれであったとつくづく思う次第である。しかし何もこのような資質にこだわる必要はないであろう。数学の見方もまた時流とともに変化する。若い人々には自分で物事を見つめ、考える権利がある。古い殻を突き破って新しい息吹が生まれることを期待したい。残念ながらそれを私個人がもはや理解できるとは限らないが。

# 多元数理科学研究科より

## 平成22年度名古屋大学大学院多元数理科学研究科

### ◎博士課程(後期課程)入進学相談会のお知らせ

名古屋大学大学院多元数理科学研究科では博士課程(後期課程)冬期募集に先立ち、当研究科後期課程への入進学希望者(修士1年次の学生の参加も歓迎します)を対象に以下の日程で相談会を開催いたします。

10月24日(土) 11月21日(土) 12月19日(土) 1月23日(土)

(いずれも午後を予定しています。)

会場: 名古屋大学 多元数理科学研究科(理1号館)

相談会では、後期課程での教育研究などについての質問や相談にお答えするとともに、修士論文や研究内容あるいは学習方法等について個別にアドバイスを行います。相談会にご参加をご希望の方は以下のURLから事前登録をお願いいたします。

<http://www.math.nagoya-u.ac.jp/ja/admission/2010/meeting-2.html>

なお、当日の参加も受け付けておりますので、お気軽にお越しください。また遠方の方にはこちらから教員が出かけるなど、状況に応じた方法を検討させていただきます。

◎詳細については、以下のページをご覧ください。修士1年生の参加も大歓迎です。

<http://www.math.nagoya-u.ac.jp/ja/admission/index.html>

◎また、この件に関するご質問などは以下のメールでお問い合わせください。

[examDC10@math.nagoya-u.ac.jp](mailto:examDC10@math.nagoya-u.ac.jp)

## 入試情報

### 平成22年度名古屋大学大学院多元数理科学研究科 入学試験

博士課程(前期課程)第2次募集 願書受付 1月中旬

試験期日 2010年2月9日(火) 合格発表 当日

博士課程(後期課程)冬期募集 願書受付 1月中旬

試験期日 2010年2月10日(水) 合格発表 当日

平成22年度名古屋大学大学院多元数理科学研究科前・後期入学試験に向けて入試説明会を開催予定です。日時、場所が決まり次第下記アドレスに掲載します。

<http://www.math.nagoya-u.ac.jp/ja/admission/>

## ◎数学アゴラ

数学とその応用に興味を持つ高校生および高校教員を対象として、今年も8月5日(水)から7日(金)の3日間夏季集中コースが開催されました。参加者は83名(高校生61名、教員22名)でした。



秋には数学公開講座を開講予定です。

日時: 平成21年10月31日(土)、11月7日(土)の2日間 14:45~17:00

会場: 名古屋大学 理1号館(多元数理科学研究科)

対象: 数学とその応用に興味を持つ一般社会人、高校生および高校教員  
詳細は <http://www.math.nagoya-u.ac.jp/> をご覧ください。

参加料  
無料

## 教育支援室より

7月22日、皆さんは皆既日食をご覧になりましたか? 多元玄関前で、先生方、学生の皆さん、支援室のメンバーと共に、数分間の部分日食(8割食)を見ることができました。薄い雲のカーテンの向こうに見えた三日月型の太陽と、集まった皆さんの笑顔、この時の感動は一生忘れません。ところで、疑うこと無く、この時間、この場所での感動でしたが、いつ頃から予測できたのか少し調べてみました。2千数百年前に数学で日食を科学的に予測し、予言として政治をも動かしていた古代ギリシャの人々がいたとのこと。やはり自然科学の基礎『数学』の力があったのです! 日常生活では気が付かない、しかしこんなにも身近にある数学の不思議さ、魅力を強く感じた1日になりました。

森川 綾

夏休み最後の日に見学希望の高校生が二人支援室にやってきました。「数学が大好きで、何時間やっても飽きない。将来は名大に入学して数学を勉強したい。」とうれしそうに話していました。建物の中や、パンフレット、Newsletterを見たりして、さらに夢を大きく膨らませて帰って行きました。こんなことも支援室の仕事のひとつです。夏は数学アゴラ、オープンキャンパス、大学院入試など、将来ここで学ぶことになる可能性のある人たちと触れ合うことの多い季節です。また、最近は支援室メンバーによりウェブやパンフレットの英訳作業が進んでいます。これもまた将来ここで学ぶ可能性のある人たちとの触れ合いのひとつでしょう。ひとつひとつの触れ合いを大切に仕事をしていきたいと思っております。

小崎和子



## 編集後記

今回、初めて編集を担当させていただきました。大変なこともありました。学生さんや先生、支援室の皆様のおかげで、発行に至ることができて、嬉しく思っております。取材に応じてくださった皆様には本当に感謝しております。次号は、さらにより充実したNewsletterを作成することができるよう、心を尽くしたいと思います。皆様からのご意見、ご感想をお待ちしております。

辰巳順子

## 名古屋大学 大学院多元数理科学研究科

〒464-8602 名古屋千種区不老町

TEL(052)789-2833 FAX(052)789-5397

### 企画編集 教育研究支援室

「学生プロジェクトを支援する数理科学教育プログラム」ウェブページ  
<http://www.math.nagoya-u.ac.jp/gp/>